

令和 3 年 6 月 17 日現在

機関番号：32689

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2020

課題番号：18H05570・19K20780

研究課題名（和文）日本統治期台湾における義太夫節浄瑠璃の上演に関する基礎的調査研究

研究課題名（英文）Basic research on the performance of Gidayubushi jyouuri in Taiwan under Japanese rule

研究代表者

李 思漢（LEE, SZU HAN）

早稲田大学・坪内博士記念演劇博物館・助手

研究者番号：70822237

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、従来の日本演劇史や台湾演劇史で看過されてきた植民地における宗主国の伝統芸能の発展様相を考察した。三代目竹本大隅太夫の台湾巡業の経緯を追うると同時に、植民地台湾においては女義太夫と素人義太夫が特に大きな牽引役であり、彼らを中心に活動が盛んになっていった、という内地とは相当異なる伝統芸能の流行の特徴を明らかにした。また、日本と台湾との素人衆による芸能活動とその意識も比較し、移民社会であった台湾における伝統芸能の成立過程の一側面を検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の日本演劇史においては、「中央劇壇」以外の地域的な特色はあまり言及されておらず、各芸能ジャンルにおいてその芸風の伝承や発展の維持に欠かせない一般の芸人やアマチュア、また女性の存在も無視されがちである。よって、本研究は演劇史の研究手法の他、「民衆史観」を参考にしつつ、現在の日本国内の文楽史には語られていない外地の興行形態及び地域の芸術的な特徴を考察し、植民地という特殊な時代や環境のもとでの伝播の特徴の解明を試みた。日本の演劇史における空白部分を補填するものになると期待される。

研究成果の概要（英文）：This study investigates the performance and development of Takemoto Osumi tayu, Female gidayu and Amateur gidayu in Taiwan under Japanese rule. In colonial Taiwan, Female gidayu and Amateur gidayu were particularly influential, and that activities flourished. This study clarified the characteristics of traditional performing arts trends that differed considerably from those in the mainland. This study also compares the performing arts activities and attitudes of amateur performers in Japan and Taiwan, and describes one aspect of the process of establishing traditional performing arts in Taiwan, which was an immigrant society.

研究分野：伝統演劇

キーワード：台湾 日本統治期 義太夫節 女義太夫 素人義太夫 人形劇

1. 研究開始当初の背景

大正二年は、明治期の二人の名人が同時に文楽の表舞台から去った年で、文楽史の大きな節目とされている。竹本摂津大掾の引退が有終の美を飾ったのに対し、三代目竹本大隅太夫は植民地台湾と共に極めて哀れな印象で日本演劇史に刻まれている。「なぜ名人大隅太夫が台湾へ巡業に出たのか？」というのは、本研究の着想当初の最も強い疑問であった。しかし、従来の文楽史に関連する研究は、その事件の経緯、また植民地台湾における義太夫節浄瑠璃の興行形態や発展状況について詳細に追及したものはなかった。大隅太夫の台湾巡演の実現は、当時台湾島内における義太夫節浄瑠璃の観客数がすでに一定の規模に達していたことを示す。植民地台湾における義太夫節浄瑠璃の発展は十分に注目に値すると考え、大隅太夫の台湾巡業とその影響を考察するのみならず、戦前の台湾における義太夫節浄瑠璃の発展史の解明も試みようと思うに至った。

2. 研究の目的

申請者は、三代目竹本大隅太夫の台湾巡業の背景を知るために、明治期の台湾における女義太夫の活躍、素人義太夫の盛況、そして人形浄瑠璃の上演など、義太夫節流行の実態解明に努め、研究の蓄積を進めてきた。また、大正二年の大隅太夫の公演が大盛況であったことはもとより、台湾では昭和になってからも義太夫節の人気は衰えず、女性太夫は義太夫節を指導し続け、台北の素人太夫らも小グループの「連中」を拡大して「臺北素義因会」を作り、内地の素浄瑠璃や文楽の渡台公演も跡を絶たなかった。植民地台湾における義太夫節浄瑠璃の「ポスト大隅時代」も興味深く、明治期との比較、若しくは内地での発展との比較を通して、その継承と変化、また植民地ならではの発展状況についてさらに調査を行い、これまで解明されてこなかった義太夫節浄瑠璃の台湾での発展の歴史を総括したいことを目指した。

3. 研究の方法

本研究は、ドイツの演劇学者 **Dietrich Steinbeck** が提唱した「上演関連の原始資料に基づく歴史研究方法」を用いて、新聞・雑誌に掲載された批評や演劇関連の記事、そして劇場の広告・上演記録・パンフレット・写真、また伝記・回顧録などの資料を可能な限り収集し、同時期の日本における伝統芸能の実態を参照しながら、植民地台湾における義太夫節浄瑠璃の発展の全体像を明らかにすることを試みた。

4. 研究成果

(1) 日本統治期の台湾における文学創作は「外地文学」と名づけられ日本帝国の文学系脈に統合されていた。その時代の「日本語文学」に対する研究活動は今日でも依然として盛んに行われている。それに比して、植民地台湾における日本の伝統芸能の興行と発展はあまり重要視されていないのが現状である。そこで、本研究は、『台湾日日新報』や戦前台湾で出版された芸術系の雑誌に掲載された劇場の広告、演劇関連の記事を考察・分析し、同時期の日本における伝統芸能の発展の実態を参照しつつ、植民地台湾における義太夫節の伝播の概況を明らかにすることを目的とし、また植民地という特殊な時代や環境のもとでの発展の特徴も考察してみた。

(2) 大隅太夫の来台の契機については、従来、相三味線を務める三代目豊澤團平の推薦と、台

北の太夫元の丸中氏の招請という二説があるが、大隅太夫が台湾巡業を決める際には、渡台の経験を持つ東太夫と大島太夫から多少の影響を受けたと思われる。この二人は、大隅太夫と一緒に堀江座から近松座までずっと同じ一座のメンバーを勤めており、また、大島太夫は大隅太夫の預かり弟子であると『台湾日日新報』で紹介されたこともある。つまり、周りの人々の実際の台湾進出の成功談が、大隅太夫の渡台の道を開くのに最後の一押しをしたのではないかと考えられる。

大隅太夫の台湾巡業を回顧してみると、おそらくは台湾の出演を機に、今後も現役の太夫として舞台に立ち続け自分自身の価値を取り戻そうというのが、当時の大隅太夫の心境だったのではあるまいか。その一方で、当時の劇評には、大隅太夫が過去の病気の影響から、声や表現力が衰退してきたことを暗示する記載も見られるものの、全体的には、新垣宏一が、「この名人の來臺その事が在臺好事家達にとつては有難いことであつたらしく、到る所、一般の評判は良かったのである」と指摘しているように、内地での公演と遜色のない相当な人気を博したとみられる。

(3) 台湾で活躍した女義太夫の内地での記録は、確認できるものが非常に少ない。日本統治期に台湾に長年滞在して活躍していた女義が注目されなかったのはやむをえないとしても、日本から台湾の興行に参加した女義も東京を中心とした女義界に同じく注意を払われなかった原因を考察してみると、彼女らの招聘が地縁的關係をもつ寄席の経営者によって左右されたことのほかに、巡業で一時期台湾へ出てきた女義の拠点がすべて近畿地方であったということもある。つまり、台湾の女義界は、東京より関西の女義界との繋がりが極めて緊密であったのである。

渡台芸人の多くが関西や九州出身であったことは先行研究でも指摘されているが、このことは台湾の女義界を大きく特徴づけているといえる。台湾に進出した女義太夫の中には、当時競争の激しかった女義界で、一流でない太夫が出世の機会をうかがって台湾進出を決意した場合もあっただろうと推測できるが、実は義太夫節の本場で芸力を培い、東京の容姿を売り物とした「娘義太夫」とは一線を画した実力者も多かったのではないかと考えられる。

(4) 明治三十六年（一九〇三）十月の『台湾日日新報』の紙面上には、「台北の義太夫界」という記事が三日間にわたって連載され、明治三十年代の台北における素人義太夫の生き生きとした発展の有様を映し出している。この記事を通して、明治時代の台北素義界のメンバーと団体に関する具体的な状況が分かり、植民地における日本人社会の輪郭も捉えることができる。台湾では、素人義太夫の発展初期、女義太夫の周りにグループができてゆく傾向が見られ、台湾の素義は女義太夫の芸に追随し、その一門の弟子になることが一般的であった。さらに、明治期の台湾における素義連中が女義太夫の後援団体という性質を持っていたか否かについては、今後の研究課題の一つとしたい。

また、專業芸人向けの因会とは対照的に、素人義太夫向けの「台北素義因会」の成立は極めて異例と言えよう。植民地において專業芸人の来台は短期の巡業のみであり、義太夫節の長期発展は素人衆なくして続かないという事情も明らかであるが、「台北素義因会」についてはその活動概況を知ることのできる資料が乏しく、その後の具体的な運営形態や全貌については現時点ではよく把握できていない。

(5) 近世の浄瑠璃の発展様相について、神田由築氏は「江戸の浄瑠璃が、寄席と女義太夫の興隆を特徴としたのに対して、大坂の浄瑠璃は素人浄瑠璃に特色がある」とまとめている。こうい

う大勢は近代になっても大きな変化はないと言える。植民地台湾には日本各地から移住者が集まってきたため、寄席、女義太夫、素人義太夫は日本内地のように、それぞれの拠点において単独で活動、伝承されていくのではなく、ほかの日本伝統芸能と肩を並べて植民地で独自の発展を遂げ、同郷の繋がりをさらに強めるという役割も果たしていた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 李思漢	4. 巻 44
2. 論文標題 梅蘭芳と日本統治下の台湾劇壇 『台湾日日新報』の記事を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『演劇研究』	6. 最初と最後の頁 41-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 李思漢	4. 巻 0
2. 論文標題 日本統治期台湾に於ける素人義太夫の発展について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『「日本演劇・映画人の 台湾時代 植民地舞台にみる文化的交錯 国際シンポジウム」予稿集』	6. 最初と最後の頁 25-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 李思漢	4. 巻 0
2. 論文標題 日治臺灣的「素人義太夫」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『「日本演劇・映画人の 台湾時代 植民地舞台にみる文化的交錯 国際シンポジウム」予稿集』	6. 最初と最後の頁 55-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 李思漢
2. 発表標題 日本統治期台湾に於ける素人義太夫の発展について
3. 学会等名 「日本演劇・映画人の 台湾時代 植民地舞台にみる文化的交錯 」国際シンポジウム
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会	開催年
「日本演劇・映画人の 台湾時代 植民地舞台にみる文化的交錯」国際シンポジウム	2019年～2019年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------